

江戸時代の疫病退散一天神祭の宵宮飾り

1. 企画の意図

天災や流行り病など、目に見えない災難に直面したとき、江戸時代の人々は何を考え、どのように対処してきたのでしょうか。彼らはその原因を怨霊の祟りと考え、その勢いを鎮めるために祭りを行いました。

大阪くらしの今昔館では、江戸時代の大坂の町並みを再現した常設展示室で、テーマ展示「江戸時代の疫病退散一天神祭の宵宮飾り」を開催しています。ここでは、疫病退散を願って、入口に魔除札を貼り、店の間や床の間に造り物や掛軸を飾って、災難を乗り越えていった先人の知恵と祈りを紹介しています。

今年の天神祭は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、陸渡御、船渡御、奉納花火は中止になり、大阪天満宮の神事のみになりました。疫病の恐ろしさは今も昔も変わりません。200年前の天神祭の宵宮風景から、疫病退散を願った庶民のくらしが見えてくるかもしれません。



天神祭の花火（今昔館近世展示室）



200年前の天神祭宵宮風景（今昔館近世展示室）



天神祭に引き出された船形山車「天神丸」(大阪天満宮蔵)

2. 展示の紹介

【天神祭の宵宮飾り一疫病退散の町並み】

天神祭の宵宮では、日常生活道具を素材にした「造り物」が飾られました。写真は、唐物屋に飾られた嫁入り道具一式の獅子の造り物です。獅子には悪魔を圧する霊力があると信じられ、中国から日本に伝来しました。日本では、神社で狛犬と対になって獅子の像を置き、魔除けとしました。新年や祭礼に舞う「獅子舞」も、悪霊退散の呪術です。



嫁入り道具一式の獅子の造り物

【金太郎は疱瘡除けのシンボル】



古来日本では、疱瘡（天然痘）をもたらず疫病神（疱瘡神）が赤色を嫌うと信じられており、患者の周囲を赤いもので満たす風習がありました。そこで、赤い色を身に着けたり、赤で描かれた酒田公時（金太郎）や鍾馗の絵を飾りました。今昔館では毎年御迎人形（大阪天満宮蔵）を町会所の表座敷に飾っていますが、今年は疱瘡除けのシンボルである金太郎を飾っています。赤い衣装に赤い顔が特徴です。

御迎人形「酒田公時（金太郎）」
（大阪天満宮蔵）

【流行り病に打ち勝つ！ 鍾馗さんや神農さんの掛軸を飾る】



呉服屋での展示の様子

鍾馗は中国から疫病をはらう神として伝わり、五月の端午の節句には、疱瘡除けのため、幟に鍾馗の絵を描いて戸外にたてたり、五月人形として座敷に飾ったりしました。神農は中国医薬の祖で、世の中のありとあらゆる草を自ら試して薬効があるかどうかを確かめました。この2つの掛軸は江戸時代の大坂で制作されたものです。疫病退散の願いとともに町家の床の間に掛けられていたことでしょう。今回は呉服屋の店の間に飾っています。



しゆんき
鍾馗像



しんのう
神農像

【疫病退散の御札】



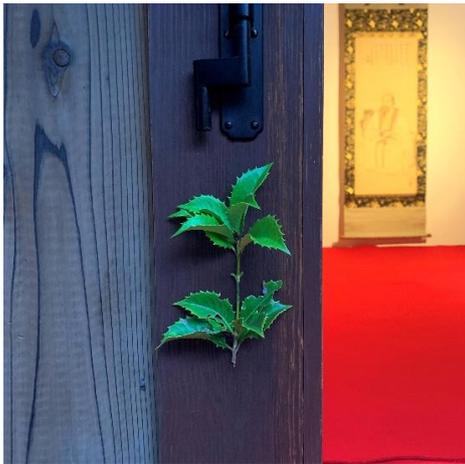
本屋の店先に貼られた魔除札



裏長屋に貼られた魔除札

平安時代の比叡山の高僧「元三大師^{がんざんだいし}」が鬼の姿になって疫病を退散したという言い伝えから、江戸時代の人々は家の入口に「元三大師降魔札」を貼りました。この札を模した、今昔館オリジナルの御札を貼っています。

【鬼除けはヒイラギの葉の棘】



町家の鬼門の柱

ヒイラギの葉の棘が鬼の目を刺すので門口から鬼が入れないと言われています。一般に節分の日に鰯の頭と柊の葉を門口に飾る風習があり、日本各地に広く見られます。今回は、厄除け・鬼除けでヒイラギの葉を町家の鬼門と裏鬼門に飾りました。

【コレラ退治の虎】



張子の虎

激しい下痢などの症状が出るコレラは、1日千里を走る虎のイメージと重なり、「虎狼痢」「虎烈刺」「虎列拉」「虎列刺」などと記されました。普段は人形屋の棚に収納されている張り子の虎ですが、店の表で皆さんをお出迎えしています。

